

万葉の川心

元横浜市立子安小学校 教諭 澤井園子

上野国の相聞往来の歌

(巻第十四 三五〇五番歌)

うち日さつ 宮の瀬川の 貌花の
恋ひてか寝らむ 昨夜も今夜も

朝起きてカーテンを開けたとき、ペランダの小さな変化に気付くことがある。昨日まで確かに無かったのに、一輪の花が咲いている。数日前からつぼみを膨らませ、期待を募らせてくれる鉢もあるが、こうして突然驚かせる花もある。ペランダに花が咲いた日は、良いことが起こる日と勝手に決めていた。そのこともあり、本当にうれしい。暑くて風が強くて過酷なこの地でよくぞ育ってくれたという感謝もある。(実は、生きられる植物だけが枯れずに育ったという方が正しい。)辛いことが続いた日も、ペランダの花は「充分がんばってるね」見ているよ」と言っているように感じる。凛と咲く姿には何とも憧れる。だからあと少し、前に進める気がしてくる。

歌の「うち日さつ」は、「うち日さす」と同じで、「宮」に冠する枕詞である。「貌花(かほばな)」の現代名については、アサガオ、オモダカなどの説もあるが、ヒルガオが有力とされている。巻第十の二二八八番歌にある「貌花」は石橋の間に生えており、いずれも川のそばに生えたとすると、「かほよ草」という異名があるカキツバタではないかとする説もある。万葉集の中で「カホバナ」は、四首詠まれているが、すべて同じ花が異なるのかは定かではない。いずれにせよ、可憐に咲く花が、愛しい人を想い起こさせるのである。「光り輝く宮の瀬



長野県茅野市西茅野大橋より宮川を望む

川の淵に咲く昼顔が、夜は静かに花を閉じて眠るように、あの子は私を慕いながら寝ているだろうか。昨夜も今夜も。「花を昼顔と見ると、日中には薄紅の花をいっぱい開いて、夜には眠るように小さくしぼんでしまう。その姿に心ひかれて詠まれた歌は、この宮の瀬川の人々に愛され歌われていたのではないかとされている。咲いた時の美しさを詠むだけではなく、昼と正反対の一日でしぼむ姿までいとおしむ感じが伝わってくる。この前後の歌は、紫草、朝顔、薄穂、藤などの植物が詠まれており、この配置も興味深い。宮の瀬川の位置は不明だが、長野県諏訪市を流れる宮川かという説がある。写真は、長野県茅野市西茅野の西茅野大橋から宮川を望んでいる。川の流れと、そこに生きる動物・植物が織りなす物語を、人は万葉の昔から歌として語り継いでいる。

川に桜の花びらが舞い散り流れる。紅葉が流れに踊り、下っていく。河原一面に菜の花が咲き乱れる。四季折々の川と花の物語がある。見る人が笑顔になる。それだけで、今日はいい日だ。